

平成 30 年 5 月 19 日現在

機関番号：11301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02052

研究課題名(和文) 学校における子どもの死-非業の死の受容に関する宗教学的的研究

研究課題名(英文) The Death of Children at Public Schools: Religious Studies Research on the Psychological Acceptance of Disaster related Deaths

研究代表者

大村 哲夫(OHMURA, TETSUO)

東北大学・文学研究科・助教

研究者番号：30620281

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：東日本大震災では、多くの児童生徒も犠牲となった。宗教的活動が禁止されている公立学校では宗教儀礼による慰霊を行えない。そこではどのようにして子どもの非業の死を受容しているのだろうか。私は犠牲者を出した学校で、死児に卒業証書を授与していることに注目し、実態調査を行った。その結果、多くの校種において卒業証書が授与されており、遺族からではなく、学校側から授与の提案がなされていた。また授与年度から、死児が死後も歳を重ねる民間信仰と通底する心性の存在が分かった。

比較としてグアテマラ先住民についてフィールド・ワークを行ったところ、子どもは、神に近い存在として独自の儀礼が行われていること等がわかった。

研究成果の概要(英文)：Many school children fell victim to the Great East Japan Earthquake; however, at public schools, where religious activities are prohibited, religious ritual based memorial services could not be conducted. Consequently, this leads us to ask, how are disaster related deaths accepted in society? To answer this question, I conducted a fact-finding survey of schools that issued diplomas to pupils that were disaster victims. The result was that in many cases the schools, which ranged from kindergarten to high school, and not the bereaved families, proposed the conferring of diplomas to deceased pupils. Further, in accords with folk beliefs the year for conferring the diploma correlated with the presupposed aging after death of the school children. Additionally, as a comparison, I conducted fieldwork among the indigenous people of Guatemala and learned that there is ritual for children, who are commonly thought to be closer to God.

研究分野：宗教心理学, 臨床死生学, 宗教人類学

キーワード：東日本大震災 死者供養 学校 子ども グアテマラ 追悼・慰霊 卒業証書 グリーフ・ケア

1. 研究開始当初の背景

東日本大震災によって、学校に通う子どもも多く犠牲となった。このような大規模災害において、非業の死を遂げた子どもの死の受容にかかわる大規模な実態調査は、これまで見られなかった。

また宗教的活動が禁止されている公立学校における慰霊の実態についての研究もなく、生き残った幼児・児童・生徒（幼稚園、小学校、中学校・高等学校等に所属する子ども。以下児童生徒と略）、遺族・遺族以外の保護者、教職員など関係者の心のケアがどのようになされているのかがい知ることには困難であった。

しかし震災に関わる報道の中で、死亡した児童生徒へも卒業証書を授与しているという記事が見られ、研究代表者は、死児への卒業証書授与は一種の「死児供養」ではないかという仮説を立てるに至った。

卒業証書は、法で規定された公的文書であり、校長が授与するとされている。死亡して学籍が存在しない児童生徒に授与することは法的には根拠がなく、一種の「脱法行為」であるとも言える。一般的に遵法意識が高いとされる公立学校で、このような行為が行われたのはなぜであろうか。研究代表者は、これまでの研究で、「人が非合理的行動をあえてとる時、そこに心理的に深い意味がある」（大村、2016 ほか）と述べてきた。死児への卒業証書授与にも、法的根拠を無視しても行わなければならない「意味」が込められていると考え、それこそが「供養」としての意味ではないかと仮定したのである。

死児に卒業証書を授与する行為は、過去にも全国各地でいじめや事故、事件、病死などによる児童生徒の死に関わって見られ、決して珍しいことではない。しかしながら、単一の災害で多くの子どもが犠牲となったケースについての調査がみられないだけでなく、これら過去の死児へ卒業証書を授与する行為についての調査・研究も見つけることができなかった。

申請時（2014 年）は、東日本大震災の被害がなお深刻な状況にあり、被災者への聞き取り等調査は、インフォーマントの心理的状态から鑑みても困難な状況にあった。一方、復興事業の推進によって被災した学校の統廃合が進み、学校関係者の人事異動も多く行われ、調査はますます困難となりつつあり、速やかな調査を実施し、貴重な記録を残すことは喫緊の課題であった。

2. 研究の目的

学校という公共空間において、児童生徒の非業の死をどのように受容してきたかについて明らかにしようとした。

子どもの死は児童生徒、遺族・保護者、教職員に大きな悲嘆を与えるが、日本国憲法および教育基本法によって「宗教的活動」が禁止された公立学校では、宗教儀礼を用いるこ

とができない。

研究代表者は、死児に卒業証書を授与している実態に注目し、その背景に民間信仰の「死児供養」に共通する心性が存在することに注目した。

すなわち本研究をとおして、児童生徒の慰霊・追悼について、量的および質的調査を行うことによって、その実態を明らかにすると共に、その宗教学的背景を探り、心理的機序を明らかにし、延いては子どもの死に関わるより効果的なグリーフ・ケアの構築に寄与することを目的とした。

3. 研究の方法

調査対象は、日本国内および国外の2箇所を設定した。一つは東日本大震災の被災地であり、もう一つは文化の異なる中米グアテマラにおける子どもの死の受容である。

（1）東日本大震災の被災地については、被災3県（福島県、宮城県、岩手県）における公立学校を対象にした質問紙調査（2013 年および2026 年）を行った。

質問紙は、予備調査で確認した選択肢と、自由記述欄を組み合わせて作成した。主な調査目的は、死児への卒業証書授与の実態把握に加え、その行為のもつ意味と、行為の意思決定過程に焦点をあてた。

学校における子どもの死（いわゆる管理下であるかないかに関わらず）というデリケートな問題を扱うため、事前に設問について教育委員会と協議した。また答えたくない設問には白紙でよいこと、死児への対応（卒業証書授与の有無など）の是非は問わないことを明記するなど、インフォーマントの心情に侵襲的にならないよう倫理面に配慮した。

質問紙調査とは別に、犠牲者を出した学校へのフィールドを実施し、慰霊祭・慰霊碑等について調査した。

（2）海外では中米グアテマラ共和国の先住民を調査対象とした。グアテマラ共和国の高地にはマヤ系先住民が集住している。マヤ人は、紀元前よりマヤ文明といわれる高度な文明を発展させたが、17 世紀のスペインによる侵略によって独自の文化や宗教が破壊された。宗教文化の側面から見ると、表向きのカトリック信仰の蔭に、マヤ信仰の要素が存在しており、宗教の多重の様相を示している。これは日本における神道と仏教との関係性にも類似している。

先住民の集落へのフィールド・ワーク（2016 年および2017 年）を実施し、先住民および先住民の民間司祭・シャマンへの聞き取りや参与観察を実施した。

4. 研究成果

東日本大震災に関わる研究成果は以下のとおりである。

（以下宮城県のデータによる）

(1) 死児への卒業証書授与は、幼稚園の66.7%、小学校33.3%、中学校59.1%、高等学校2.9%で行われていた。

(2) 授与は、遺族ではなく学校側の発案で行われていた。

(3) 死亡年度ではなく、該当児童生徒が生きていれば卒業したはずの年度の卒業式において授与されていた。

これらのことから、次のようなことがわかった。

幼稚園から高等学校まで多くの校種で授与が実施されていたこと、遺族だけではなく、学校側にも授与の必要性があったことが明らかになった。

卒業証書の授与年度や調査票の記述から、死亡した児童生徒が、生き残った児童生徒と共に、学び続け、一緒に卒業していくという意識があったことが明らかになった。このことは死児が死後も歳を重ねていく民間信仰の「死児の齢を数える」心情と通底する心性があることがわかる。

これらをまとめて考察すると、宗教的活動が禁止された公立学校で行われている死児への卒業証書は、民間信仰と共通する心性をもち、慰霊・追悼の意味と、関係者の癒しの効果をもっている。また池上良正(2003, 2006)の分類によると、学校の主催する追悼式などは「祭祀システム」であるが、卒業式に死亡した児童生徒個人に卒業証書を授与する行為は「供養システム」であるということが出来る。これらのことから、学校における子どもの死の受容とグリーフ・ケア、グリーフ・ワークの在り方に有益な示唆を見出すことができる。

海外調査については、先住民、先住民のシャマンへの聞き取りや宗教儀礼への参与観察などのフィールド・ワークを実施した。グアテマラ先住民の民間信仰の実態や、民族衣裳に見られる図章には、マヤ宗教に由来するものが多く見られた。カトリック信仰とのシンクレティズム・融合というよりマヤの独自性を残した重層的構造をもつことが窺われた。

子どもの死については、子どもは神に近いものとして大人と異なる独自の儀礼があることなどがわかった。文化を越えて、子どもの死には特別な対応が求められることが分かった。更に深い調査が必要である。

東日本大震災に関わる卒業証書授与は、被災した当時、小学校1年生であった児童が「卒業」する年を迎え、授与されたことの確認を得、おおむね調査は終了した。成果は、

心理学の国際学会 The 31st International Congress of Psychology で、発表すると共に日本宗教学会、印度学宗教学会、日本民俗学会等で発表した。

また共著で成果を公刊(『宗教を心理学する データから見えてくる日本人の宗教性』2016年)し、最終的なデータを追加した英語版(The Psychology of religion: Religiosity among Japanese findings from the data 2019年)も刊行が決まっている。

成果の知見を生かした共著書(『保育と心理臨床をむすぶ』2018年や、依頼論文等(「宗教からみる現代人と宗教性-非合理のなかにある大切なもの」2017年)など、貴重なデータを踏まえた研究成果を積極的に還元している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

大村 哲夫(依頼論文)「宗教からみる現代人と宗教性-非合理のなかにある大切なもの」『心理臨床の広場』日本心理臨床学会 9巻2号 2017年3月30日、査読なし

大村 哲夫(講演記録)「非業の死と卒業証書：公立学校における子どもの死の受容と宗教性」『平成24年度採択私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 G -5「地域福祉ネットワークにおける宗教者の可能性」シンポジウム「宗教者支援の可能性-つなげる力・支える力」』東北福祉大学、2017年2月、査読なし

〔学会発表〕(計6件)

大村 哲夫、研究発表「慰霊儀礼としての卒業証書-東日本大震災における子どもの死と学校」日本民俗学会第69回年会、佛教大学、2017年10月15日

大村 哲夫、研究発表「「死者の日」からみる Guatemala の宗教文化」印度学宗教学会第59回学術大会、東北大学、2017年5月27日

大村 哲夫 講演・シンポジウム(招待)「非業の死と卒業証書：公立学校における子どもの死の受容と宗教性」『平成24年度採択私立大学戦略的研究基盤形成支援事業 G -5「地域福祉ネットワークにおける宗教者の可能性」シンポジウム「宗教者支援の可能性-つなげる力・支える力」』東北福祉大学、2016年10月15日

大村 哲夫、パネル発表「「卒業証書」と聖人からみる子どもの死の受容と宗教性」『宗教を心理学することの意義と可能性』日本宗教学会第75回学術大会、早稲田大学、2016年9月10日

大村 哲夫, 研究発表「子どもの慰霊と卒業証書」印度学宗教学会第 58 回学術大会, 郡山女子大学, 2016 年 5 月 28 日

Tetsuo OHMURA, Diplomas for the Dead: The Great East Japan Earthquake and Memorial Services for Children in the Public Schools where Religious Activities are Prohibited The 31st International Congress of Psychology (Yokohama, Japan) 2016 年 7 月 25 日

〔図書〕(計 3 件)

Tetsuo OHMURA, et al.
The Psychology of religion: Religiosity among Japanese findings from the data, Elm Grove Publishing, 31st, Dec. 2019
刊行予定(入稿済み。頁数不明)

大村 哲夫, 他, ミネルヴァ書房「子どもの世界と宗教性」『保育と心理臨床をむすぶ』2018 年 6 月刊行予定(入稿済み・頁数不明)

大村 哲夫, 他, 誠信書房, 「東日本大震災の被災地から見る日本人の宗教性-非業の死を遂げた子どもへの慰霊をめぐって」『宗教を心理学する データから見えてくる日本人の宗教性』第 1 章 pp.20-44, 2016 年 7 月 25 日

6. 研究組織

(1) 研究代表者

大村 哲夫 (OHMURA, Tetsuo)
東北大学・大学院文学研究科・助教
研究者番号: 30620281